

京大図書館と私

小川環樹

私のこれまでの生活の大半は書物を相手にして過ぎてしまった。従って図書館との因縁はたいへん深い。学生のころ、今の旧書庫の西、すなわち教育学部の建物のところに在った大閲覧室の片すみで、勉強に疲れると、小説類を借り出して頭を休めた。「即興詩人」の英訳をよみ、デンマーク語に興味をおぼえ、少し片端をかじりかけてやめたのも、その閲覧室のことだったし、鏡花全集を何冊もよんだし、柳田国男氏の「石神問答」などそのころ絶版であった本を見つけ、著者の署名をながめて、うれしく思ったのも、そのころである。記憶をたどると、京大図書館で読んだ本といえ、たいへん私の専門に直接の関係がないものが多い。

それにつけて思い出すのは、小学生の時分、姉につれられ、始めて岡崎の府立図書館へ行った時のことである。姉は私が小説ばかり借りて読むのを見て、「もっとためになる本をよみなさい」と言った。その癖は今日まで何十年、少しも改まらない。しかしスポーツは何一つせず、趣味らしい趣味もない私にとって、図書館は恐らく最大の楽を与えてくれたと思う。

京大図書館に正式に勤務したことは一度もないが、昭和十二年の秋から約半年、目録編成のお手伝いをしたことがある。当時の館長は羽田亨先生であった。どうしてそんな仕事を与えられたかと言うと、その前年、私が文学部の副手として、支那学会大会に展覧するための「近衛文庫漢籍目録」を作ったことがあったからではないかと思われる。近衛家の蔵書は当時まで長く京大に寄託されていた（陽明文庫ができたのは戦争中である）。目録は五十音順にならべたのが早くできていたが、私の任務はその中の漢籍を（和刻の普通本を除き）えらび出して経史子集の順序にならべかえることであった。そのために私は二か月ほど費やし、全部の漢籍に目を通し、内容と版本を確かめねばならなかった。このとき図書館のかたがたに非常なお力ぞえをいただき、特に的屋勝氏にはお世話になったし、司書官の山鹿誠之助氏はいろいろ教えて下さった。古版本についての私の知識はこのとき得たものであった。

十三年に私は仙台へ行ったので、戦後二十五年に京大へ戻るまでは空白になる。古い大閲覧室はたぶんその間に或る事故で焼失した。そこをまた訪れることができないのは、ほんとうにさびしい。それでも図書館というと、私はきまって最初にあの学生閲覧室を思い浮べる。高い天井の下のうすぐらい電燈の下で、あまり「ためにならない」本を読みふけていた制服の学生。その時代は二度とかえらないのはぜひもないとして、図書館の効用は専門書だけにあるのではなく、老子のことばで言えば「無用の用」にあるのではないか、とも思うことがある。

（文学部教授）